

わが心の自叙伝 菅原洋一

.....▷18

1967(昭和42)年「知りたくないの」が大ヒットして「紅白」に出場した翌68年、仕事は多忙を極めていた。ほとんど家に帰ることもできない状態だったが、日々充実していた。あつという間に年末、その日は「レコード大賞」の発表日だった。大みそかにテレビで発表するようになるのは(現在は30日)、この翌年、69年からで、その頃は12月初旬に審査会で各賞が決められ、そのままラジオで発表されることになっていた。

前年、私は歌唱賞を次点で逃していたが、今回も歌唱賞候補に入っていた。祈るような気持ちでラジオに耳を傾けてた。するとラジオから、「本年度の歌唱賞は、誰もいない」。

私はそれを聞いて「こういう年もあるんだなあ。ああ今年も駄目だったか」と思った。だがその後ラジオは、菅原洋一と言

「今日でお別れ」

「今日でお別れ」のレコードジャケット



つたのだ。
「えっ? 今誰もいないと言ったではないか...」。よくよく考えて自分で吹き出してしまっただけ。それはそれらしくしてからだった。実はこの年の歌唱賞候補の題名が「誰もいない」だったのである。自分の曲名を呼ばれながらすっかりしたことはやけに印象に残っている。

70年には「今日でお別れ」で「レコード大賞」のグランプリをいただいた。すでに大みそかの「紅白」前の番組で大賞発表の形だったが、夏ごろから「音大出歌手同士の激突」と新聞や雑誌が書いていた。つまり国立音大の私と東京芸大の岸洋子の「希望」が最後まで競り合っていたのである。

「レコ大」受賞、幸せの極み

岸さんは年齢が私よりひとつ下。2人とも30代後半に近づいていた頃だ。大人の歌手同士、本格派の歌がヒットチャートににぎわせ大賞を競い合う、ある意味、とてもいい時代だった。

ところが思わぬ事態が発生したのである。

9月末だったと思うが、岸さんが故郷、山形県酒田市でのイベント会場で倒れ緊急入院。膠原病と診断され、闘病生活に入ったのだった。それでも「レコード大賞」の歌唱賞には私とともに当然の入賞。当時は歌唱賞5人の中から大賞を決めるルールがあったが、最終的に岸さんは大みそかに復帰できなかった。

結局、私が大賞を受賞するが、今になっても「もし岸さんがあの日元気だったら、どういう結果になっていたか分からなかったなあ」と思うときがある(すがわら・よういち||歌手)

大賞が発表されるまで候補の歌手たちも客席に座ることになっていたが、これが実に心臓によくない。「手紙」で由紀さおりも歌唱賞入りしていたが、菅原さんが取ったら、ほほにキスするわね」なんてリハーサルするとき言われたが、彼女は本番で堂々とそれを実行してくれたことを思い出す。

さらに会場には、妻のアケミと娘の歌織が来ていて、司会の高橋圭三さんに促されて舞台上に上がった。妻はハンカチで目を押さえ、歌織は握手してほほ笑んでくれた。この年にはもうひとつうれしいニュースがあった。5月17日に息子の英介が生まれたのだ。

こんなに幸せでいいのかと思いがちだが、パトカーの先導で「レコ大」から「紅白」の会場へと向かった。